

都市住民と農村との交流・協働事業に係る事例報告

Case report on exchange and cooperation work between urban residents and rural areas

秋山 高善・小峰 園子・本間 秀和・岡田 道程

Takayoshi AKIYAMA・Sonoko KOMINE・Hidekazu Homma・Michinori OKADA

概要

本稿では、近年注目されている都市住民と農村との交流・協働事業に着目し、その実践事例を報告し、それぞれ考察するものである。一つ目の事例は、葛飾区郷土と天文の博物館で実践している田んぼの学校による都市住民と農村交流のひろがりについてである。この事例では、博物館という場を通じて都市住民と農村が今後いかにして交流事業を行い、活動を続けていくべきかを考察する。二つ目の事例は、都心から90分という身近な田舎である南房総での10年間に渡る実践活動についてである。この事例では、農家と都市住民との“協働”が、未来の食の安全、里山の環境保全へ果たす役割について考察する。

キーワード：博物館，体験学習，学び，田んぼの学校，相互扶助，協働，里山，田舎，都市，産直，二地域居住

Abstract

In this paper, we pay attention to the exchange and cooperation work between urban residents and rural areas which have received attention in recent years, and report on practical cases and consider each of them. The first case study is about the spread of urban residents and rural exchanges by through what is known as the “School of the rice field” practiced in the Katsushika City Museum. In this case, we will examine how urban residents and rural areas should conduct exchange programs and continue activities through the Katsushika City Museum. The second case study examines a continuing ten year long program in the Minami Boso rural area, a short ninety minutes from Tokyo. In this case, we will consider collaboration between farmers and urban residents, the future food safety and the role of ‘Satoyama’ in environmental conservation.

Keywords: Museum, Eco-museum, Cooperation, Satoyama, Rural area, City, Direct from the farm, Multi-habitation

1. はじめに

本稿は、近年盛んになってきた都市住民と農村との交流や協働事業をとおした意義や役割について、事例報告を行っている。一つ目の事例は、葛飾区郷土と天文の博物館の事例である。葛飾区郷土と天文の博物館では、田んぼをとおして都市住民と農村との交流事業を実践し、その事例を報告し、課題や展望について考察している。二つ目の事例は、南房総地域にあるほんまる農園の事例である。ほんまる農園では、都市住民が里山を訪れ、その里山での都市住民と農村との協働をとおして食の安全や環境保全活動に関する実践事例を報告し、課題や展望を考察している。

これら二つの事例は、いずれも近年盛んになってきている都市住民と農村との交流・協働事業として先駆的で、かつ、非常に注目すべき事例であろう。なお、本稿は、いずれも2017年度春の共栄大学公開講座「食の安全と農業、農産物～地域と世界からこれからの農業、農産物の安全性を考える～」と題して行われた講演を踏まえてのものである。

2. 田んぼの学校を行う博物館～都市住民の農村交流のひろがりについて～

2.1 概要

近年、都市に生活の拠点を置く住民の中で、農村の持つ自然、環境、資源、農村文化の歴史や伝統などに魅力を感じ、農村に興味関心を抱く人が増加している。このような現象は、手軽に農業ができる市民農園利用者の増加や、家族と一緒に農村体験や自然体験ができるグリーンツーリズム参加者の増加などからも窺うことができる。都会でみられる「農村熱」は、メディアの影響もあり盛んになりつつあり、都市住民たちは、様々な手段を用いながら農村部との交流を行うためのフィールドを模索している。

一方で、過疎に悩まされ、経済的にも困窮した状況にある農村では、農業を生業として成り立たせることばかりでなく農地を維持していくだけでも厳しい状態にあり、離農、離村が相次ぐ地域もめずらしくない。このような現象は、村社会はおろか、自治体までも崩壊させる勢いである。農村でもこの状況から脱却するべく、それまでの流通システムに頼らず、都会から人を呼び、大消費地である都市に生産物売り込み、起死回生を願う農家や団体も増えてきている。

都市住民と農村住民では互いを必要としており、相互扶助の関係を結ぼうと必死になっている。しかし、互いの意向がなかなか合致せず、持続的な活動として展開している事例はまだ多くないのが現状ではないだろうか。

今回紹介する、都市と農村の交流事業は、東京の葛飾区郷土と天文の博物館を拠点として、多くの都市住民が主体となって行っている活動事例である。そもそも、歴史的に農村地帯としての伝統を持ち、昭和40年代以降、急速に都市化した葛飾区であるが、博物館ではその歴史や風土を学ぶために、「田んぼの学校1」と銘打って十数年前から農業体験を行う講座を展開してきた。

その中で、様々な人たちと試行錯誤を繰り返しながら、現在子どもとその家族を対象とした稲作体験講座「田んぼジュニア」、畑の収穫物の栽培から食べるまでを学ぶ「収穫体験教室」そして、それらジュニア講座をサポートする教育普及ボランティア「田んぼサポーター」といった3つの講座を抱えるまでになった。それぞれの講座は農業体験を一つの軸にしながらも、目的を分け、都市住民として農村地域であった葛飾区が育んできた歴史や文化をどう継承していくかを、そしてこれから未来に向けて都市と農村がどのように向き合っていくべきかを考えながら活動を行っている。

本稿では、このような活動を行う葛飾区郷土と天文の博物館の農業体験事業と、受け皿のひとつである茨城県つくばみらい市旧谷和原地区で活動しているNPO法人「古瀬の自然と文化を守る会」を紹介したい。そして数十年間にわたる都市農村交流活動をふまえて、その問題点、活動の展望などを博物館という視点から提示したい。

2.2 葛飾区郷土と天文の博物館における農村体験事業の経緯と意義

2.2.1 博物館における農村体験事業の経緯

東京の東部低地に位置する葛飾区は昭和30年代までは、一面に田んぼが広がる農村地帯であり、江戸時代以来、都市近郊農村として発展してきた歴史を持っている。稲作、畑作ともに特徴ある生産活動を行っており、当博物館においても農業や農村に関する資料が多く収蔵されている。しかしながら、昭和40年以降の急速な都市化によって農地は減少し、景観も大きく変化してしまった。特に水田稲作は完全に消滅してし

まっており、米どころであった葛飾区は、現在その片鱗すら窺い知ることが難しくなってしまった。このような特徴を持つ葛飾区の農村や農家の伝統そして文化を、区民の財産として後世に残していく事を目的に始まったのが、博物館における農業体験事業であった。当初は区内の子どもたちを対象として、博物館前の110平米の小さな田んぼを耕し、苗を作り、田植えをする、といった活動からスタートした。これをきっかけとして、博物館は葛飾区以外の地域と交流し農業ならびに農村体験事業を展開していくのである。

2.2.2 博物館における農業・農村体験事業の位置づけ

当博物館では地域博物館として、地域住民とともに、博物館に収蔵されている資料等を用いて、農業や地域の歴史を学ぶことを目的として事業を展開している。そもそも、博物館とは、歴史や文化に関係する資料を展示する場所という認識が一般的である。しかしながら、博物館で扱われる地域の生業や生活文化に関するものは、人が人の手で伝えていかなければ、新しい様式や技術が入ってくることにより次々と消滅してしまう。例えば、手作業で行う田おこしや田植えや草取りの仕方などは、広く一般に知られる技術であるが、実は地域ごとに細かな違いがみられる。それは、その土地の地質や気候のもと培われてきた先人たちの知恵に基づく技術である。しかしながら、博物館で単に鍬やマンノウ、除草機などを展示し、使用方法などに関して文字で説明を重ねてもなかなか見に来ていただいた方に伝わりにくいのである。地域の生業や文化に関する様式や技術を知ってもらうには、博物館に収蔵されている資料など、あらかじめ学芸員が十分に調査・研究を行った上で、使用法を行為とともに伝え体験してもらいながら学ぶということに重点を置く必要がある。

葛飾区のように急速に都市化が進んでしまったような地域では、農村の生業や生活文化などを体験するフィールドさえなくなってしまったのが現状である。そこで重要になってくるのが農村との交流なのである。後述するように、葛飾区郷土と天文の博物館では、葛飾区と同じ沖積平野の低地で似たような自然環境を持つ茨城県つくばみらい市旧谷和原地区と交流活動を行っている。そこでは都市住民が農村住民と一緒に活動を行うことで、昭和40年代以前の葛飾の自然環境や生業を体感し、また旧谷和原地区独自の地域性も合わせて学んでいる。

博物館のあり方が問われる昨今、住民参加を原則としたこれからの地域博物館では、地域住民とともに地域の文化を継承していく体験学習事業が非常に重要な位置を占めている。都市農村交流の観点からも、都市住民が農業・農村の魅力を経験し理解して、楽しみ、活動していく体験学習事業は、都市と農村の相互扶助の関係を構築する手段として有効である。

2.3 都市農村交流活動—都市住民参加活動の現状—

2.3.1 田んぼクラブジュニア / 収穫体験教室

葛飾区郷土と天文の博物館では、平成11(1999)年より田んぼクラブジュニア(以下、田んぼジュニア)という講座を行っている。この講座は区内外の小中学生とその保護者を対象に、農業が作ってきた環境と文化を学び、農村の連帯や社会構成を、農家の人々との交流を通じて知るための総合的な体験学習の場となっている。近郊型農業を現在も展開する茨城県つくばみらい市旧谷和原地区(以下、谷和原地区)で、かつて葛飾区で行われていた農機具を使い、生産されていた農作物を復元して栽培することにより、現代の葛飾区の子どもたちに祖先の環境と文化を実体験させることができる。

田んぼジュニアでは谷和原地区で活躍するNPO法人「古瀬の自然と文化を守る会」(以下、古瀬の会)の方々から直接農業や農村の環境や文化について教わり、年間5回谷和原地区で活動を行っている。苗代作りから田植え稲刈りにいたる米作りやかまどでの炊飯、竹細工などの農家の暮らしなどを体験する。博物館でも、館の前にある田んぼを利用して谷和原地区での活動を補完する学習をおこなっている。

今年度(平成29(2017)年度)、田んぼジュニアの登録者は約50名である。そのうち約40名は区内の小中学生だが、家族全員で、また、孫と一緒に参加する方なども見られる。最近では、足立区、江戸川区、千葉県市川市などの周辺地域、また、遠く都心部から活動に参加する方も増えてきた。なぜこの活動に参加

したのかを聞くと、ほとんどが、農村での自然体験（昆虫採集や魚とりなど）を楽しみたいという。10月、田んぼや水路の水をくみ上げて行われるクミッカエ（カイボリ）といわれる魚とりは大変人気で、大人も一緒に泥だらけになりながら、普段はあまりみるのでできない田んぼや水路に棲む淡水魚を捕獲し、スケッチをとり、種類を調べる。その時、米を作るための田んぼや水路が、生きものにとっても重要な場所であることに気づかされる。そもそも稲刈りの終わった田んぼで行われるクミッカエでは、田んぼや水路にいる鯉やフナなどを食べるために捕獲していた。この行事は稲刈り後しかできないので、ここで取れた鯉などは農家の人たちにとってご馳走であった。このように自然体験を行う際、農村の環境が人々の暮らしとともに育まれてきた背景があることも、子どもたちに必ず学んでもらっている。

もう一つの大きな柱である農業体験については、田植え稲刈りのイベント的な作業に偏らず、農家ももっとも神経を使う苗代作りや、骨を折る草取りなども体験してもらっている。子どもたちは、稲作の苦労も体験した上で、現在主流となっている田植え機やコンバインなどの機械を使った農作業も見学する。そこで、なぜ現代の農家は少ない人数で何町歩も田んぼを耕すことができるのか、活発な稲の品種改良と消え行く品種、小規模農家の苦労、高齢農家の離農などについて問いかけ、すべてを見た上で改めて葛飾区の代表的生業でもあった水田稲作を考えてもらう。

また、10月からはじまる収穫体験教室では、サツマイモなどの根菜類など畑作物も種まきから収穫まで一部体験してもらっている。食育の観点からも、子どものうちから食べ物はどのように育ち、私たちの口に入るのかを学ぶ必要があり、農業とからめた食の体験を行っている。年に数回行われる餅つきは、葛飾区、谷和原の両地区で栽培されていた「タロベエモチ」という糯品種を使い、古瀬の会の指導のもとで葛飾区の子どもたちやその保護者が体験し、試食している。このように単なる農業体験にとどまらず、食文化にまで目を向け、都市住民が農村住民に教わりながら、学んでいるのである。

この活動を通じて江戸時代から続く葛飾区の農村としての伝統や文化を学ぶことはもちろん、未来を担う子どもたちが、現代の厳しい農業事情を踏まえて「食べること」「つくること」などを体験の中から学び、そして考える力を育むことができるような講座を展開している。現在田んぼジュニアや収穫体験教室は博物館がイニシアチブを取っているが、後述する田んぼサポーター、古瀬の会のメンバーとともに活動の内容を見直している。毎年の活動の結果を受けて、応用を試みながら、農村を総合的に学ぶ活動を行っていきたいと考える。

2.3.2 田んぼサポーター

田んぼサポーターは前述の「田んぼジュニア」をサポートする組織としてはじまった。現在では農業を体験する博物館の講座の中で最も活動数が多いものになっている。この田んぼサポーターの活動が、都市農村交流における都市側の参加例として、そして、博物館活動としても重要な位置づけにあると考えている。サポーターは昭和30年代まで残っていた葛飾の農村社会における、様々な伝統や文化を学習する場において活動の補助を行うのみでなく、より農村サイドに近いところで、いわば農村のサポーターとして、多岐にわたる活動を行っている。米作りはもちろんであるが、農家からの指導の下、サツマイモ、大根、大豆、小豆などを作り、毎年収穫祭や田んぼジュニアや収穫体験教室の活動で、その生産作物を使用し試食会などを行っている。

いままでは都市側の参加者を牽引する立場にあった、古瀬の会の方々もサポーターに意見を聞きながら、活動の一部を彼らに任せて行うようになった。特にそれが顕著に見られるのは、初めて農村部に訪れ活動に参加する田んぼジュニアの子どもたちや、その保護者への農業指導である。それまでは古瀬の会に頼っていた農作業の細かな説明や指導も、現在ではサポーターが積極的に行い、サポーターの口から農村の楽しさや魅力が語られるようになったのである。これは、サポーターである都市住民が農村側の参加者とともにさまざまな農村の魅力を再発見し、交流活動に主体的に関わっているとみてとれる。

また、現在田んぼサポーターの活動でもっとも力を入れて行われているのは、博物館という場所を利用し



【写真】 コロガシという除草機を使用し、田の草取りを体験する平成 20 年茨城県つくばみらい市旧谷和原地区

た教育普及事業である。田んぼサポーターでは「わたしたちはお客様に農作物を分けたり、農業の知識を教えているのではありません。農村で様々な体験をした時や自然の素晴らしさを学んだ時のわくわくした感動を提供しているのです」というスローガンを掲げて活動している。もと農村である葛飾区の田んぼサポーターという団体だからこそ来館者の方々に竹細工教室や、脱穀もみすり精米体験、自然の素材を使用した玩具作りなどを体験してもらいながら、農村を知らない昭和 50 年代後半から平成生まれの若い世代に「農村の楽しさ」を語りかけ、都市農村交流の第一歩を踏みだせるきっかけづくりを展開してもらっている。

サポーターの会員は葛飾、足立などの都市住民合わせて約 20 名である。50 代から 70 代の参加者が多く、退職後の生きがい活動として参加している方がほとんどである。また、70 代後半のメンバーの中には農村出身者の方もみられる。農作業は子どものころから経験しており「昔は農作業がいやでしょうがなかった」「田舎はいやだった」という話をよく聞く。しかしながら年齢を重ねて、都会での生活年数のほうが長くなればなるほど、農業や農村と何かしら関わりを持っていきたいと思う人が多くなっている。

田んぼサポーターにこの講座になぜ参加するのかを問いかけると「今は農業や農村体験が楽しくてしょうがない」「ここにくるのが、ストレス発散になる」「自分が子どものころ遊んでいた、つりやさかなとりを田んぼジュニアの子どもたちに教えたい」といった声を伺うことが多い。気軽に出かけられる田舎に子どものころの思い出を重ねて、まず自分が楽しみ、満喫している参加者が多いのではないかと考える。

実は田んぼサポーターは博物館のほかの講座と比べると、会員数が少ないわりに、活動数が多い。そのため会員一人に対する負担が大きいのであるが、不思議とそれに対する不満は少なく、会員のほとんどは月に約 2 回ある活動日には必ず顔を出すほど出席率が高い。また、毎年会員登録を更新するリピーターが多いのも特徴である。それは、主な活動場所となる谷和原地区が葛飾区周辺から車で約 1 時間、電車でもほぼ同じ所要時間で気軽に出かけられるからかもしれない。しかし、一番彼らが楽しみにしているのは、農村側の参加者である古瀬の会の人たちと一緒に活動するという事なのではないだろうか。つまり、農村自体の魅力ももちろんだが、そこに参加する人達の魅力に惹かれて足しげく農村に通っているのではないかと推察される。

今後はこのような活動に賛同する都市側の参加者を募集し、田んぼサポーターの会員増加につなげること

が欠かせない。また、現在登録している会員とともに、常に新たなテーマを見つけながら、農村に密着し都市と農村の掛け橋として活動していこうと考えている。

2.4 都市農村交流—農村側の受け入れ体制—

2.4.1 NPO 法人 古瀬の自然と文化を守る会

谷和原地区の農村住民の方々を中心とする古瀬の会は、田んぼを拠点に環境保全や農業活動を行っているNPO 法人である。会員の総数は約30名である。会設立のきっかけは、谷和原地区寺畑集落で、それまで水利管理が難しく放置されていた水田の環境復元を地区の有志たちの手で始めたことであった。名前にもある古瀬とはその場所のことである。古瀬の会は、復元された湿地の水田を利用して、田んぼジュニアはもちろん、東京都立葛飾ろう学校、地元の小絹小学校への稲作体験指導なども行っている。古瀬の会で主に活動をしているのが、谷和原地区に住む50代から70代の兼業農家約10名である。農家として、この地に生まれ育った根っからの農村住民もいれば、定年後都内から谷和原地区へ移住し古瀬の会の会員として活躍している人もいる。

都市住民と行う活動は前述した田んぼジュニア、収穫体験教室、田んぼサポーターの活動が主であるが、その他にも、田んぼに葉の色の違う稲を使って絵を描く田んぼアートを行っている。この田んぼアートは谷和原地区を走るつくばエクスプレスの車窓から観覧することができ、「谷和原地区が小貝川流域の良質な土壌に恵まれた稲作地帯で、おいしいコシヒカリの生産地であることを広く知ってもらおうこと」と「都市住民(非農業者)などに米の消費拡大をアピールすること」を目的としている。田んぼアートでは、五月に会員が平板測量で図柄を水田におろし、このイベントに賛同していただいた参加者(協力者)とともに田植えを行っている。そのほか稲が生えそろう七月初旬に高所作業車を利用した見学会、十月には稲刈りをかねた収穫祭を行っている。この活動に賛同した参加者は協力費として一口5000円を支払い、秋に谷和原地区自慢のコシヒカリ5キロもしくは同様に名産の黒大豆を受け取ることができる。田んぼアートの事業は好評を得て、今年で12年目を迎えることとなった。

このようなイベントや活動で利用する農地や活動場所の管理は、古瀬の会のメンバーがほぼ毎日行っている。都市住民を受け入れて活動を行うことは農村側に大きな負担となつてのしかかることは自明のことである。しかしながら古瀬の会のメンバーは「農村に都会の人がたくさん来てもらえれば、昔のように村がにぎやかになって、集まりが増え、のむ機会が増える。集まる機会が増えれば、集落の農家同士はもちろん、外から移住してきた人たちとの交流も増え、互いの理解も深まる。」と評価する。そのために多くの都市住民を受け入れ、村の未来をかけて活動を行っているのである。

また、現在はこのような活動に興味を持った大学生などの若い人たちも古瀬の会をサポートし始め、その負担を少しでも軽減しようと、そして楽しく活動ができるようにと一緒に行っている。これは、農村側が都市住民を受け入れ、地道な活動を通じて、得ることのできた最高の副産物だったのではないかと考える。

2.4.2 都市農村交流における農産物販売活動

古瀬の会では、消費者である都市住民へ安心な食の提供を行うことで、農家の生産意欲を高め、あわせて会の活動をPRしている。葛飾区郷土と天文の博物館で不定期に開催している、博物館交流市という農産物直売市に会で生産した農作物を出荷・販売している。特に会員の生産した有機栽培米は、田んぼサポーターをはじめ、博物館で古瀬の会を知った多くの都市住民へ契約販売されている。これは都市住民の食へのニーズが直接農業生産者に伝わり、生産農家の生産意欲を高め、地域経済の活性化に結びついているといえよう。

また、以前古瀬の会では地元の谷和原地区西部に広がる新興住宅地でも月に一度、農産物の直売を行っていた。きっかけは、古瀬の会の活動に参加した住民や、活動に興味を持った住民が、自治会を通して直売の開催を希望したことであった。新興住宅地の住民のほとんどは都心や中核都市に働きに出ているサラリーマン層であり、非農業者である。活動の実績が安心・安全な地元の農産物へのニーズを高め、生産者側を動か

すことになった。現在人員不足のため中止状態である。

このように都市住民（非農業者）による多様な生産・流通支援活動が、信頼にもとづく新たな農産物の販路を作り上げ、農村の経済活動の活性化に多少なりとも寄与している。

2.5 都市住民参加型の都市農村交流事業の課題と展望

以上、葛飾区郷土と天文の博物館における都市農村交流活動を都市住民の主体的な参画、農村側の熱意ある受け入れ体制、それらをつなぐ「博物館における田んぼの学校」という視点から概観してきた。最後に、都市住民の交流活動の課題を整理してみたい。

都市住民にとって農村と交流を持つことは、普段の生活と比べると全く別の社会に飛び込むことであり、お客様というような感覚で農村と接することが多い。しかしながら、その立場に甘んじ、農村社会を市民農園の感覚で捉え、農業体験においても個人主義に走ってしまう参加者がいることも事実である。不特定多数の都市住民を相手に募集をかけている当館の講座でも、住民はそれぞれ多種多様なねらいを持って参加している。お客様感覚や個人主義に走る参加者の対応を含めて、それぞれの活動のねらいが達成されるように、活動組織の中でいかにして最低限の目的意識を共有してもらうかが最大の課題であるといえる。

二つ目の課題は、多くの参加者に喜んでもらうことを追求しすぎてしまい、どうしても行事やイベントが主体になってしまうことがあげられる。もちろん参加者が楽しむことは、農村体験には必要不可欠であり、持続可能な活動を行ううえでは非常に重要なことであろう。しかしながら、独自性や、流行などを意識しすぎて、地域性を無視するような内容では、都市農村交流の目的のひとつである、農村資源や環境の保全、農村文化の継承に関わる意義を否定してしまうものとなる。地域経済や社会の活性化も交流を継続するためには欠かせない。都市と農村の交流事業はそのバランスが難しいのである。

都市と農村の相互扶助は文字通り相互が同等の立場で助け合っていかなければならず、お互いが恩恵を受ける交流活動でなければ、持続的なものにはならない。長年にわたり、都市農村交流事業を行ってきて、成功や失敗を繰り返しながら、築かれた都市住民と農村住民の絆は、この交流事業の結果であり、事業の原動力そのものであるだろう。それを踏まえて長年の活動の結論として都市と農村をつなぐ組織の重要性があげられるだろう。都市農村交流を行う上で、本稿で紹介してきた博物館のように、独立した立場で、都市農村交流活動をコーディネートし、かつ都市と農村の地域性を十分理解し、両者の住民をつなぐ役割をもつ組織の重要性を感じるのである。

これからの都市農村交流活動は農村側からの、要請に、都市側がこたえる一方通行的なものだけでなく、都市住民が、農村側と自由に意見交換をし、互いの地域について、主体的に考えそして学びあえるような関係性を構築していく必要があるだろう。

葛飾区郷土と天文の博物館では、元農村という歴史的な背景を生かしながら、葛飾区という行政区分を越えて、広く都市住民に周知し、多くの都市住民の交流活動への参加を促進していきたい。そして、次世代を担う若い世代へ農業を発展的に継承していくためにも、多くの都市住民、農村住民とともに、活動を続けていきたい。

3. 農家と都市住民の協働による食の安全・環境保全

3.1 活動の経緯と背景

3.1.1 南房総地域の概要

活動の拠点となる南房総地域は、千葉県の房総半島の最南端に位置している。3方を海に囲まれ、変化に富む海岸線を有し、沖合を流れる黒潮の影響を受けた温暖な気候が卓越している。地域内には、千葉県最高峰の愛宕山（408m）を有しており、緑豊かな丘陵地が広がる。

近年、アクアラインをはじめとする高速道路網が整備されたことにより、東京の都心から90分という短い時間でアクセスが可能となった。

農業は稲作を中心としており、温暖な気候を生かした露地花等の花卉、枇杷、温州みかん等の園芸や、ゆるやかな丘陵地の地形を生かした酪農が盛んである。一方で、大規模な平野部や大地部の少ないことを反映し、1戸あたり耕地面積は他地域と比較すると小さく、経営規模も相対的に小規模な農家が多数を占めている。

3.1.2 南房総の里地・里山

里地里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域として定義される（環境省 2017）。この里地里山は、数世紀にわたり伝統的な農業の営みによって維持されてきたものである。

房総半島は、東京周辺の大都市圏に位置しながら、高度経済成長期に産業構造の著しい変化を経験した神奈川県や静岡県との東海道沿道と異なり、農業や漁業を基盤とする1次産業が卓越する地域であり（菊池 1982）、今でも、良好な里地里山が広く残っている地域として知られている。

里地里山は、1次産業による食料や木材等の自然資源の供給地として重要であり、さらに、絶滅危惧種等の多様な生物の生息・生育環境としても欠かすことのできない自然である。現在では、人間と自然環境の持続可能な関係の再構築を目指していくという観点から、日本の里地里山で伝承されてきた技術や文化が海外からも注目されている。

3.1.3 南房総の里地里山の現状

ここ数年の急速な農家数の減少と農業者の高齢化によって、里地里山地域における人間の農的営みが縮小してしまった。その結果、全国レベルにおいて、人間の農的営みによって維持されてきた里地里山の生物多様性が量・質ともに低下し、危機にさらされている。

千葉県においても、1950年に18.4万戸だった農家数は、1960年代以降も一貫して減少しており、2015年には6.3万戸にまで減少した。農業従事者の高齢化も1970年代から続いており、2005年の千葉県の農業従事者における60歳以上の割合は47.8%とほぼ2人に1人となり、平均年齢も64.8歳に達している。県内の耕作放棄地面積は、1980年中頃まで3,000ha程度で推移していたが、それ以降、急激に増加して2005年には約1.7万haに達した。（北澤 2011）。耕作放棄地の増加は、イノシシの餌の供給源と隠れ場所を提供することにつながり、イノシシによる農作物被害は、野外に放獣された1980年代後半以降、特に2000年代に入ってから著しく急増している（北澤・浅田 2010）。害獣による農作物被害は農家の営農意欲を減退させ、さらなる耕作放棄地の増加につながるという、負のスパイラルが生じているのが現在の里地里山の現状である。

3.2 南房総地域における農家と都市住民の協働活動の展開

地方で急速に進行している過疎化や高齢化の現状を鑑みると、この里地里山の窮状を、従来どおりに、田舎の地域の中だけで解決策を見出していくことは非常に厳しい状況であるといえる。南房総地域に関しては、大都市圏に近接しているメリットを最大限に生かし、都市住民のような外部の多様な担い手との連携を通じて、里地里山の保全を行っていくことが必要だと考える。

3.2.1 オンラインショップや農作業体験を通じた消費者との交流—南房総ほんまる農園の事例—

南房総ほんまる農園では、約1.8haの水田でコシヒカリともち米を、約40aの畑でそら豆等の露地野菜を栽培している。海藻等を発酵させた地元産の有機質肥料を積極的に使用し、農業に頼らない、環境保全型農業実践している。

収穫したお米や野菜は、主にオンラインショップを通じて、直接消費者の元へ届けている。お米の収穫が終わると、毎年、食味検査を実施し、お米の美味しさを客観的な数値で把握している。その数値を見ながら、

その年の天候状況や施肥等の管理方法を振り返り、年々栽培方法に改良を加えていった。その結果、現在までに食味値が80以上のお米を安定して収穫できるようになっている。野菜の主力商品であるそら豆については、収穫後の時間経過によって、豆の美味しさが急速に失われる特性ももっているため、お米と同様に栽培方法を工夫することに加えて、収穫したそら豆をいかに早くお客様にお届けできるかに着目した。事前に収穫される量に見合った発送予約を把握した上でそら豆を収穫し、収穫後すぐに調整・発送作業を行うことで、首都圏では翌日の午前中にお客様に届けられるシステムを構築した。

このように、環境に配慮しながら栽培を行った、高い品質の農作物を、その美味しさを最大限保ったままお客様の元へお届けすることを第一に考えている。オンラインショップのお客様の多くは、1回きりではなく、継続してお米や野菜を購入しており、リピート率が非常に高くなっている。

農園のことを広く知ってもらうために、WEBを通じた情報発信を積極的に行っている。2008年に農園を設立して、すぐにホームページを作成し、公開した。四季を通じた農作業や収穫したお米や野菜を使った料理といった、農園での日常の様子を、写真とともに記事にして公開している。

設立当初は、ホームページやブログといったツールがメインであったが、現在では、facebookやinstagramといったSNSの活用を力を入れている。記事を瞬時に発信することができることに加え、相手からのフィードバックが得られやすいSNSは、生産者と消費者が直接コミュニケーションを行うことができる場として、非常に重要な役割を果たしている。

WEBを通じた交流だけではなく、農作業体験も農園の重要な柱の1つである。田植えや稲刈りといった水田作業に関連したものや、そら豆の種まき・収穫といった、一般的に実施されているイベントに加えて、現在では、手刈り・天日干しのソバづくりの一連の作業を体験できるワークショップを実施している。

ソバはかつて全国各地ごとに多様な在来品種が存在していたことが知られている。ソバは同一個体の花どうしでは受精・結実できず、昆虫等によって、他個体の花の花粉が運ばれることによって、受粉・結実するという他殖性植物である。そのため、近接した地域で他の品種が栽培されると、品種間で簡単に交雑してしまい、長い年月をかけて受け継がれてきた在来品種ごとの固有の特性が失われてしまう。そのため、作業性がよく、収量が安定するように品種改良された少数の品種が広まる中、全国各地の在来品種が次々と消失している現状がある（大澤 2003）。さらに、大規模栽培での大型農業機械による作業が一般化する中で、手間のかかる手刈り・天日干しでソバを作る農家も非常に少なくなった。

ソバは、品種、栽培方法や収穫後の調整の仕方によって、味、香りや風味が大きく変化する。より美味しく、個性のある蕎麦を求める若手の蕎麦職人の中から、伝統的な手刈り・天日干しで作られたソバの在来品種を残そうという動きが生まれてきた。自分のお店で使う在来のソバを自らの圃場で栽培したり、圃場を持つことまではしないまでも、在来ソバを栽培している農家まで出向き、手間のかかる除草・手刈り・脱穀作業を手伝う方が出てきている。そのような意欲のある蕎麦職人の方々は各地で実施されているソバの手刈りイベントで知り合い、情報を共有しながら、お互いのソバ刈り作業を手伝うネットワークを形成している。

ほんまる農園でも、2015年から地元鴨川の蕎麦職人の方と一緒に在来のソバづくりワークショップを実施している。圃場の耕耘や畝たて等の作業は農園で行い、ソバの種まき、除草作業、手刈り作業、脱穀作業、乾燥作業は、蕎麦職人の方と日程を調整しながら共同で行っている。一番人手のかかる手刈りの際には、首都圏から知り合いの蕎麦職人の方が集まり、大人数での作業となる。手刈り作業は大変な重労働であるが、参加した蕎麦職人の方々がとても楽しみながら手刈りに取り組んでいる姿がとても印象的であった。収穫したソバはすべてその蕎麦職人の方が買い取り、お店で提供している。ソバの消費者である蕎麦職人と、生産者である農家が、貴重なソバの在来品種を残すために、協働で取り組む事例として重要である。

3.2.2 里山の自然体験イベントと二地域居住の推進—南房総リパブリックの事例—

南房総リパブリックは、2011年に農家や建築家、教育関係者、造園家、ウェブデザイナー、市役所公務員らをメンバーに、2011年に任意団体として設立され、2012年にNPO法人化された団体である。メンバー

は現在16人で、その3割が現地の南房総在住、残りの7割が東京の都市住民で構成されている。南房総の里地里山の恵みを未来に残すために、南房総の里地里山と都市住民とをつなげることを目的としている。平日は都市部で働き、週末は南房総での生活を楽しむ、「二地域居住」というライフスタイルの実現に向けて、各種イベントなどの企画・運営を行っている。イベントは、一般的な観光業に見られるような一方通行のサービスの授受にとどまるのではなく、その体験をきっかけに双方向の交流へと発展させ、都市住民がサービスの受け手であると同時に、田舎の地域づくりの担い手になることを最終的な目標に設定している。

イベントの中心の1つが、主に都市在住の家族を対象として自然体験学習をする「里山学校」である。生き物や自然に詳しい専門家を講師とし、家族が一緒になって楽しみながら、里地里山の自然のしくみを深く体感するプログラムを提供している。

夏のプログラムでは、里地里山を流れる河川の中に入り、川底に生息している水生昆虫等の生き物を網を使って実際に捕まえて観察している。一口に河川といっても、大きな石が積み重なっている所もあれば、流れが緩やかで細かい砂が堆積しているところもあり、その環境の違いによって生息している生き物も変化する。ただ生き物を捕まえるのを楽しむだけではなく、捕まえられる生き物の種類の違いから、河川の中に存在する環境の多様性を体感できるような内容を盛り込んでいる。冬のプログラムでは、参加者自身で手作りする、しめ縄飾りづくりを行っている。地元農家のしめ縄飾りの名人に指導してもらいながら、縄をなうところからはじめて、土台となるしめ縄をつくる。飾りつけには里山の中に分け入り、採集してきた木の実等の素材を使用し、飾り付けの指導は、都心で活躍するプロのフローリストにお願いしている。都市と田舎のプロフェッショナルの技術を使い、里地里山の恵みをふんだんに盛り込んだしめ縄飾りとなっている。

里山学校のランチには、地元農家のお母さんに協力してもらい、南房総産の有機野菜、平飼いの有精卵といった地元食材をふんだんにつかった料理を提供し、好評を得ている。里地里山の生態系について深く学ぶと同時に、地元の農家とのふれあい・交流が見られることも、この里山学校の魅力となっている。



【写真】里山学校イベントで、河川に生息している生き物を観察している様子

ここ3年間の里山学校の参加者数は、2014年度がのべ173人、2015年度がのべ122人、2016年度がのべ120人である。2011年のNPO法人設立以来、通算30回以上開催しており、この自然体験に参加した人の数はのべ1000人を超えた。参加者の半数以上はリピーターであり、南房総の里地里山に積極的に関わる方も現れはじめています。

3.3 考察

多様な主体の参画による里地里山を保全する活動に関して、受け入れ側の田舎の地域の活力の程度やニーズ、都市住民等の新たな担い手側のニーズに着目した分析がこれまでに実施され、里地里山を保全する活動は、大きく6つに分類されることが知られている（環境省2012）。上記の事例を、この分類に当てはめると、ほんまる農園のオンラインを通じた農作物の販売は、都市住民にとっては安心安全な農作物の購入というメリットが、農家側にとっては里地里山の維持管理のための資金を得られるというメリットがある“③の消費活動参加型”に分類されると考えられる。同じくほんまる農園のソバ作りワークショップは、“③の消費活動参加型”と、保全活動の人手や労力の確保につながる“①の人材確保・育成型”の組み合わせに分類される。南房総リパブリックの「里山学校」イベントは、“③の消費活動参加型”に分類されるが、イベントを通じて二地域居住者を増やし、里地里山保全の担い手を増やすことを目的としており、“①の人材確保・育成型”につながる活動としてもとらえることが可能であるといえる。

このように、都市住民等の新たな担い手が里地里山保全に関わり方には様々な道筋があることがわかる。田舎側がこの点を再認識し、地域の里山の魅力を生かした新たな事業を起こし、多様な都市住民のニーズの受け皿を用意していくことが求められている。最終的には、都市と田舎をまたいで、“食と農と環境への関

表1 「新たな共同利用」の分類と特徴（環境省2012）

	分類	特徴
地域の集落等による維持管理が可能	①人材確保・育成型	ボランティアや活動指導者などの育成・導入により労力を確保し、地域の主導的管理に対して支援を行う
	②基金・資金援助型	特定目的のもとで公的機関が設置する基金等に個人や企業が資金を供出し、地域に管理を委ねる
参加機会の拡大により、幅広い対象から資金確保を行うしくみ	③消費活動参加型	地域の産品に対する消費活動を通じて市民等が間接的に管理に参加し、生産者に資金還流する
	④税等による一律費用負担型	広く里地里山の恵みを楽しんでいるという考え方のもと一般市民に税等の形で管理に対する費用負担を求める
維持管理が困難	⑤活動協定・活動認定型	所有者・担い手それぞれのニーズを協定締結や第三者の仲介のもとに結びつけ、新たな担い手による維持管理を促進する
	⑥管理契約型	自然資源の利用や土地利用などによる受益の権利も得ながら、一定のルールの下で新たな担い手に、主導的に管理を担ってもらう

心という共通項で結ばれ、ゆるい地域性をもった、知縁・結縁選択縁的なコミュニティ“(大江2008)を醸成し、南房総の里地・里山をそのコミュニティの共有財産(コモンズ)として、次世代へつないでいくことが必要だと考える。

4. アンケート結果と共栄大学公開講座の歴史

2017年6月、共栄大学公開講座の春の講座で、「食の安全と農業、農産物～地域と世界からこれからの農業、農産物の安全性を考える」を共通テーマとして、3人の講師にそれぞれ個別のテーマで連続して講演を行ってもらった。企画の目的は、私たちが毎日口にしている農産物について、農業の実情と伝統を守ることの重要性を知ってもらい、同時に食をめぐるさまざまな問題、特に食の安全性についての意識を高めてもらうことにあった。

第1回、小峰園子さんの「田んぼの学校を行う博物館～都市住民の農村交流のひろがりについて」では、昔は農村であった葛飾区の歴史を知ってもらうため、博物館が運営する田んぼの学校で、小・中学生を対象に葛飾区で古くから栽培されてきたタロベエモチの栽培から収穫までの農業体験を行う話を中心であった。他方、第3回、本間秀和さんの「農家と都市住民の協働による食の安全・環境保全～南房総の農園とNPO活動からの報告」では、生産者の視点から、いかに安全な農産物を都市住民のニーズに合わせて生産し、届けるかという双方向の目に見える関係について講演が行われた。両者は、都市部と農村、農家と都市住民の協働という共通項を持つため、講演だけで終わらせるのは勿体ないと考え、今回、論文に興して残すことを提案した。

なお、第2回、中村哲也さんの「食品内の放射性物質から子供たちを守る安全対策～欧米と日本の現状を比較して」では、放射性物質の危険性と食品の安全対策について、チェルノブイリから福島まで専門的な知識が語られたが、講演は別にまとめられ、学会論文に掲載される予定である。

企画は概ね成功し、聴講者の数はやや少なかったものの(アンケート回収数20, 20, 16)、アンケート結果によれば満足度は押し並べて高かった。具体的には、受講者の年代で最も多い層は、第1回が60代30%、70代30%、第2回が70代25%、80代以上35%で、3回目が60代38%、80代以上31%と60代以上がいちばん大きいウェイトを占めている。男女比は、3回ともほぼ同数である。また、公開講座への参加状況についての問いでは、はじめてと2～3回目という回答が10～20%と低かったのに対して、4～9回目という回答が第1回で40%、第2回25%、第3回31%と高く、さらに10回以上と答えた人は、第1回40%、第2回40%、第3回44%と極めて高いことが分かる。

次に、講義のテーマ及び内容に関する問いでは、第1回が大変良かった55%、良かった40%、第2回では大変良かった40%、良かった45%、第3回は大変良かった25%、良かった56%で、両方の合計が81～95%と極めて高い。反対に、すこしもの足りなかったを選んだ人は3回を通じて0～10%、つまらなかったを選んだ人は0～5%と極めて低い。講義のテーマと内容に関しては、3人の講師が非常に良い講演をしてくれたことが分かる。

また、講義内容の難易度を問う質問では、第1回、理解できた65%、だいたい理解できた35%、第2回、理解できた45%、だいたい理解できた40%、第3回、理解できた56%、だいたい理解できた38%で、両方の合計が85～100%と極めて高い。各講師がパワーポイントや資料を駆使して、分かりやすく丁寧に説明したことが分かる。

感想のコメントとしては、第1回で「田んぼの活動やその意義をわかりやすく説明してくれたので、とても理解できた」「郷土の行事、田んぼ、お米、おもちなど今回の講座で新たに着目でき、とても勉強になった」という意見。第2回で「放射性物質について知識をもつことが大切だと思った。知らずに恐れていた、買わないということがあった」「食品の安全についてもっと知らせてほしい。放射性物質について知らない

ことが多かった」という意見。第3回で「里地・里山の定義，自然，生態系，植物，イノシシの生息地，今の農業の状況・形など多岐にわたり勉強となった」「若い世代の方も農業に関心を持って，活躍してほしい」という意見があった。

なお，学校法人共栄学園・葛飾区教育委員会共催の「共栄大学公開講座」は，2004年（平成16年）に始まった。初年度は，秋に4回の講座であったが，翌年から，春の講座と秋の講座の2期に分けて，実施することとした。春の講座は統一テーマを設けて3回連続，秋の講座は統一テーマを設けず，4回比較的自由に設定した。例えば，2015年春の講座の表題は，「新時代の観光の潮流～5時間で学べる観光の魅力！」であり，2016年春の講座の表題は「日本人のここを探る～日本の文学・伝統・文化から」であった。

公開講座の講師は，共栄大学2学部の大学教員を中心に，共催の葛飾区教育委員会と共栄学園ともタイアップして，葛飾区郷土と天文の博物館学芸員（堀充宏さん），共栄学園中学高等学校教諭（橋本達さん）ほか，アナウンサー（向坂真弓さん），落語家師匠（三遊亭好楽さん，三遊亭楽生さん）など多彩な顔ぶれであった。そのため，「共栄大学公開講座」はリピーターが多いのが特徴で，葛飾区民に長く親しまれ現在に至っている。

ちなみに，私（岡田）は，2005年（平成17年）～2016年（平成28年）まで12年間，本講座の企画・調整・司会を担当し，2017年（平成29年）の春の講座では，企画・調整のみ担当したことを付け加える。

注

- 1 平成10（1998）年度，国土庁，文部省（いずれも名称は当時），農林水産省の3省庁合同の調査（「国土・環境保全に資する教育の効果を高めるためのモデル調査」）において，各界有識者による研究会が設置され，水田などを積極的に活用した環境教育「田んぼの学校」が提唱された。当館の田んぼの学校にかかわる事業はこの環境教育の概念に基づいて博物館という場所を通じて農業体験，自然体験を展開してきた。

引用文献・参考文献

2章

青木俊也，「戦後生活を展示する意味を考える」松戸市立博物館紀要第23号，平成28（2016）年

守山弘，『自然を守るとはどういうことか』，人間選書，1988

守山弘，『むらの自然をいかす』，岩波書店，1997

守山弘，『水田を守るとはどういうことか』，農文協，1997

（社）農村環境整備センター（現：地域環境資源センター），『田んぼの学校 プログラム集 vol.1』，2006

葛飾区郷土と天文の博物館，『村の暮らしを学ぶ 田んぼの活動～田んぼで出来ること～』，葛飾区郷土と天文の博物館，2013

3章

大江正章，『地域の力—食・農・まちづくり—』，東京，岩波書店，2008

環境省自然環境局，“里地里山とは”，入手先〈<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>〉，（参照2017-8-29）

環境省自然環境局，“多様な主体で支える地域の里地里山づくり”，入手先〈http://www.env.go.jp/nature/satoyama/conf_pu/24_11/shiryousan3_sankou.pdf〉，（参照2012-11-28）

菊地利夫，『房総半島』，東京，古今書院1959，p.248

北澤哲弥，“里山における農地利用と生態系サービス”，『ちばの里山里海サブグローバル評価最終報告書』，2011，pp.70-88

北澤哲弥・浅田正彦，“千葉県の里山における野生鳥獣の保護管理と生態系サービス”『千葉県生物多様性センター研究報告』，2，85-101，2010，pp.85-101

大澤良, “日本のソバの多様性と品種分化”, 山口裕文・河瀬真琴編『雑穀の自然史—その起源と文化を求めて』, 2003, pp.73-85

分担執筆

- 1 秋山 高善
- 2 小峰 園子
- 3 本間 秀和
- 4 岡田 道程